

# 精一杯生きよう

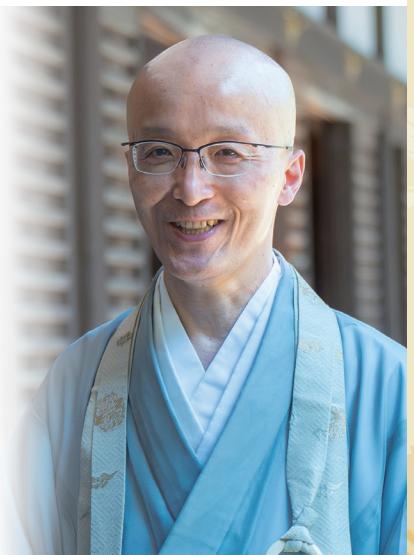
横田管長のお話

今年は戦後八十年の節目だとよく言われています。昭和二十年、一九四五年に戦争が終わったのでした。もっとも昭和三十九年、戦争が終わって二十年近くも経つてから生まれた私には、実際の戦争については知るよしもありません。

それでもまだ幼い頃には、生家のすぐそばに防空壕が残っていました。廃墟となつた屋敷跡に残つていたのでした。あそこに

は入ってはいけないと親から言われていま  
したが、入るなと言われると入りたくなる  
もので、暗い防空壕に入つて、こんな場所  
で空襲に耐えていたのだと思うと、なんと  
も言えぬ心地がしたものでした。

大きな神社や人の集まるところでは、まだ傷痍軍人さんの姿も見かけたものでした。白い服を着て、路上に坐つておられました。また、中国残留日本人孤児について、



精一杯  
生きよう  
もうこんで

円覺南極

A square seal impression in red ink, positioned above the signature. The characters are stylized and likely represent a name or a studio identifier.

円覚351号 目次

## 横田管長のお話

「精一杯生きよう」	1
管長のページ	8
信心ことはじめ⑤〇	10
明治居士列伝⑧/蓮沼直應	12
夏の健康/桜井竜生	16
らかんこうしき	
羅漢講式レポート～法要編～/ 横山友宏・由馨	20
精進料理レシピ/ 藤川譲治	22
円覚寺の至宝⑯	24

表紙・裏表紙写真 / 円覚寺派宗務本所



どんなに時代が変わったとしても、変わることのないものが、仏さまの教えであります。昔は、直接説法して伝えてきたのでした。その後経典などが木版で印刷されて多くの方が読んで学べるようになりました。最近は本を出版しては更に多くの方が教えに触れられるようになりました。書籍もありがたいことに管長に就任して以来、たくさん出さ

「降る雪や 明治は遠くなりにけり」とは中村草田男の句です。この句は、昭和六年に草田男が母校の青南小学校を二十年ぶりに訪れた時に作ったそうです。昭和六年ですから、まだ明治時代が終わって二十年ほどしか経っていませんが、こんな感慨を抱

た。残留日本人孤児とは、戦争の末期から終戦にかけて、旧満州（中国東北部）に取り残され、中国の方に養育されていた日本人の子どもたちです。一九八一年に残留孤児の肉親探しを目的とした日本政府による訪日調査が始まったのでした。当時はテレビや新聞で肉親との再会シーンが繰り返し報道されていました。しかし、それもいつしか見ることはなくなってしまった。

「降る雪や 明治は遠くなりにけり」とは

中村草田男の句です。この句は、昭和六年に草田男が母校の青南小学校を二十年ぶりに訪れた時に作ったそうです。昭和六年で

私は三十代で円覚寺僧堂の師家となり、四十五歳で管長という役目をいただいたので、いつどこに行つても「若い、まだ若い」と言わっていましたが、この頃はふと気が

いたのです。  
まだ大学生だった中村草田男は、変わらぬ母校のたたずまいに安堵しますが、雪が降り出すとともに校庭に外套を着た子どもが現れるのを見ました。自分の頃は、着物に下駄履きだったのにと、ずいぶんと隔たりを感じて作ったと言われます。

私は今も修行道場で二十名ほどの若い者たちと一緒に暮らしています。もう昭和生までは稀であり、ほとんどは平成の生まれなのであります。彼らと話をしていると、時として「昭和は遠くなりにけり」と思うことがあります。

私は三十代で円覚寺僧堂の師家となり、四十五歳で管長という役目をいただいたので、いつどこに行つても「若い、まだ若い」と言わっていましたが、この頃はふと気がつくと周りの方が若いことに驚くようになりました。管長に就任して十五年が過ぎてしましました。

食べてもらっています。

更にこの頃はインターネットもずいぶんと広まっています。YouTubeという新しい媒体を通して新たな布教も始めるようになりました。

かけがえのない身内と悲しい別れを体験して絶望の底にあつた方が、YouTubeを通じて私の法話と出会われたそうです。それがご縁となって円覚寺にも足を運ばれて日曜

食べて排泄して、服を着て、夜眠るといふあらゆる日常の営みが仏法のすべてであると説かれました。私はそんな祖師の教えを繰り返しお話させてもらつてはいるだけあります。

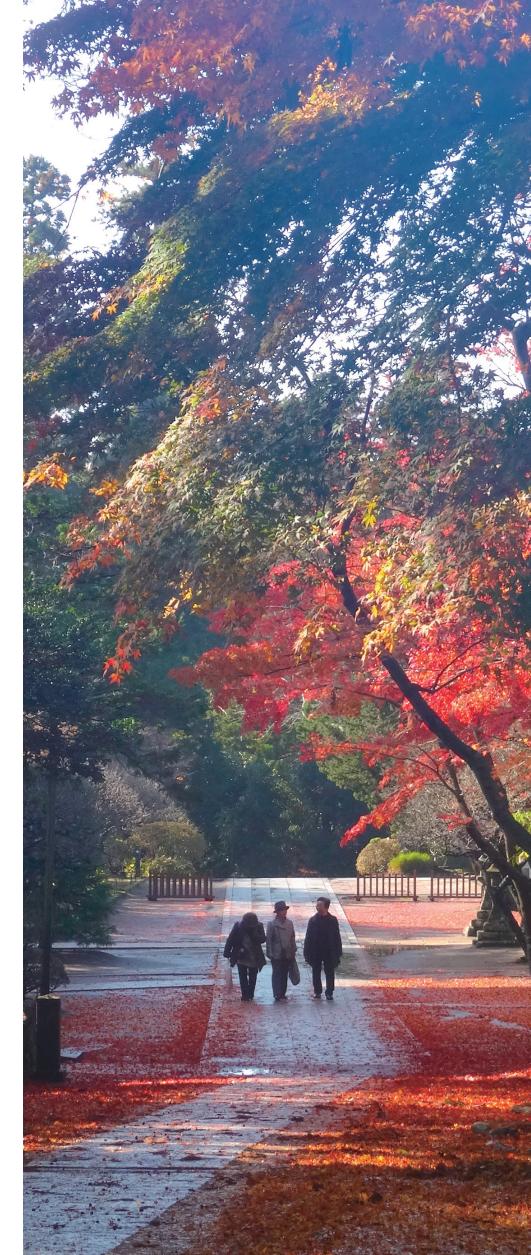
そんな話を聴かれた方から手紙をいたしましたことがあります。

その方はご主人を亡くされてから、目が見えず寝たきりの姑さんの食事やトイレの世話などの介護を毎日なさつてはいるそうです。そんな暮らしでするので、思うように外出もできぬと察します。手紙には「時々帰つてくる義姉にいろんなことを言われては、悔しさや虚しさに耐え忍んでいる毎日です」とも書かれていました。そのような方がYouTubeで私の法話を聴いてくださつたのだそうです。

を食べて佛の心をもつてはいる、食べて出して寝てはいる、この活動が佛の営みだと話をしてはいるので、私の話を聴いて「姑を佛と思った」そうなのです。そうしましたら、「日々の世話が苦痛でなくなりました」と手紙にかかれてはいる。そして「気づきをあたえてください、本当にありがとうございます。」という感謝の言葉が綴られていきました。ありがたいことであります。

またある方は、人生のさまざまな問題に遭つて、自ら死を考えるほどまで悩みながら、円覚寺の日曜説教に参加されました。その時に、「あなたの心が佛である」と話した私の一言が心に響いたそうなのです。それ以来、前を向いて生きるようになり、今も毎月の法話を通つてくださつています。

説教にも参加されるようになつています。森信三先生が「悲しみの極みといふもなほ足りぬいのちの果てにみほとけに逢ふ」と詠われていますが、このような思いをなされる方は今もいらつしゃるのです。



に渡つて伝えられたことはただ「各自の心が仏である」という、禅の真理をお伝えただけのことあります。

いつの時代になろうと、人の苦しみは消えることはありません。生老病死の四つの苦しみは、変わることはないのです。平和な時代であろうと、老いる苦しみ、病の苦しみ、そして死を迎える苦しみは避けることができません。

「愛別離苦」という、愛しい人の別れもまた苦しみです。「怨憎会苦」という、憎い人と会わなければならぬ苦しみもあります。求めても得られない苦しみが「求不得苦」です。私たちの肉体と心のはたらきそのものが苦しみだ（五蘊盛苦）とお釈迦様は説かれたのでした。

苦しみのない世界がどこかにあつて、そ



んな人のおかげを受けているので、少しでも何かお返ししてゆこうとすることです。永六輔さんは「生きているということは誰かに借りを作ること。生きていくということはその借りを返していくこと」と詠われました。松原泰道先生は、『日本人への遺言』という著書に「生きる意味とは何なのか?よくそんな質問をされます。答えは実に簡単です。すべては他のため、自分のためではありません。」と書かれています。人はたとえベッドで寝たきりになつたとしても、その生きているということが誰かの支えになり、力になります。何か大きな気づきをあたえることができます。

先人たちの苦労のおかげで今の戦争のない世を生きることができます。このことに感謝して精一杯生きなければと思います。

こに行こうというのが仏教ではありません。この苦しみの中にあつてどう生きるかを教えてくれるのが仏教です。真理を正しく観ることによつてこそ、苦しみからの解放があります。

一切は苦しみであるというのも真理であります。すべてはうつりかわるというのもできます。うつりかわるのですから、苦のままで居続けることもないのです。人は一人では生きられないというのも真理であります。単独で成り立つ存在はないのです。いろんな人のおかげで生きていけます。

そして生きることの意味は、お互いいろ